宋太祖弑害説と上清太平宮

愛宕　元

【要約】宋の太祖から弟太宗への帝位継承には不明朗な点が少なくない。弑害説が存する所以である。この問題については、全て情況証拠のみに限られるために千古の疑案視されるものであるが、疑惑をさらに強めるものが、太宗の道教政策の内に見い出される。長安西郊に本拠をもち、唐代には大きな教勢を有しながらも、唐末以後、著しく衰退に向った楼観派道教に対する太宗の異常とも思える肩入れがそれである。太宗が兄太祖を承けて帝位に即くべきことがあらかじめ決定されていたとする奇怪な神言が、即位直後に流布しており、その神のために壮大な道観が太宗により建立されているのである。この神言なるものを追跡してみると、楼観派によって意図的に作為された形跡が認められ、それを太宗が自らの帝位継承を合理化するという政治的意図のもとに巧みに利用したものと解し得るのである。次帝真宗の著名な道教尊崇、あるいは江南出身官僚の動静と合せて、宋初のすぐれて政治的な展開の一断面と言えよう。

史林　六七巻二号　一九八四年三月

はじめに

宋の初代太祖から二代太宗への帝位継承に関して、少なからざる疑惑が存したことが、古来、史家の一部の間で根強く指摘されてきた。すなわち、弟の太宗が兄の太祖を弑害して自ら帝位に即いたのではないかというものである。この問題については、つとに宮崎市定博士の論考があり、千古之疑案とするに足る史料をほぼ全て掲げられて詳論されている。[1] もっとも宮崎博士の論考は、疑惑それ自体に白黒を決する意図のものではなく、太祖期から太宗期にかけて、大きな政治的転換があったことを強調される主旨のものである。本稿であらためてこの弑害説にかかわる疑惑について取り上げるのも、

疑惑そのものが事実か否かを明らかにしようとする意図からではない。事実であったとしても、太宗以後の北宋一代を通じてなされたにちがいない実録等史料の書き換えや隠蔽工作によって、史料の上から事実を究明することはまず不可能と言ってよかろう。しかしながら、やはり情況証拠ではあるものの、この疑惑をさらに強からしめる史料が存し、かつ、これと直接に関連して建立された道観が、言わば物証として確認できるのである。本稿では、上記の関連史料の紹介とその検討を中心に、帝位継承をめぐる不明朗さを払拭して、継承問題の正当性を強く主張せねばならない太宗側の政治的意図と、教勢の衰退を新たに成立した宋朝権力と結び付くことで何とか回復せんとする道教一派勢力の思惑を関連付けて論じたい。さらには、真宗期に頂点をむかえる道教保護の宗教政策の下地が太宗期に用意されつつあったことにも言及することになろう。

① 宮崎市定「宋の太祖被弑説について」(『東洋史研究』九―四　一九　四五　後、『アジア史研究』三所収　一九六三)。

一　疑惑に関する主要史料

宮崎論文ですでに示されてはいるが、疑惑説の主要なものを後の行論上、まず掲げる。疑惑説の初見は、僧文瑩の撰にかかる『湘山野録』①続編巻中の次の記事であるとされる。②

祖宗（太祖）潛耀の日、嘗て一道士と関河に遊ぶ。姓名を定める無し。自ら混沌と曰い、或いは又た真無と曰う。乏しきこと有る毎に則ち囊金を探り、愈いよ探れば愈いよ出す。三人（二人の誤りか）は毎に劇飲爛酔す。生は善く歩虚③を歌いて戯れと為す。能く其の喉を杳冥の間に引き清徴の声を作る。時に或いは一二句、天風に随い飄下す。惟だ祖宗のみ之を聞く。曰く、金猴虎頭四、真龍得真位と。④醒るに至りて之を詰するに、則ち曰く、酔夢の語、豈に憑るに足らんやと。膺図受禅の日に至り、乃ち庚申正月初四なり。⑤御極より再び見えず。詔を下して草沢に遍く訪ねしむ。或いは轘轅道中に、或いは嵩洛の間に見ゆ。後十六載、乃ち開宝乙亥歳（八年）なり。上已に祓禊す。駕、西洛に幸す。

生、酔いて岸の太（木）陰下に坐し、笑いて太祖に揖して曰く、別れてより来、喜安なりと。上大いに喜び、亟かに中人を遣り密かに引きて後掖に入る。其の遁ずるを恐れ、急ぎ回蹕して、与に之に見ゆ。一に平時の如く、抵掌浩飲す。上、生に謂いて曰く、我、久しく汝に見え、一事を決剋せんと欲す。他無し、我が寿また幾くの多き在るを得んやと。生曰く、但、今年十月二十日の夜晴なれば、則ち一紀を延す可しと。上、酷はだ之を留め、後苑に泊せしむ。苑吏或いは木末の鳥巣中に宿せるを見る。止まること数日にして見えず。切切として其の語を記す。期する所の夕に至り、上、太清閣に御し、四つかた気を望す。是の夕、果して晴る。星斗明燦なり。上、心方めて喜ぶ。俄かにして陰蠕四起し、天気陟変し、雪雹驟りに降る。仗を移し閣を下り、急ぎ宮鑰を伝え、端門を開きて開封王（尹の誤り）を召す。即ち太宗なり。延きて大寢に入れ、酒を酌み対飲す。宦官宮妾悉く之を屏く。但、遙かに燭影の下、太宗時に或いは席を避け、勝う可からざるの状有るを見る。飲み訖り、禁漏三鼓たり。殿雪已に数寸。帝、柱斧を引き雪を斫つ。太宗を顧て曰く、好く做せ、好く做せと。遂に帶を解き寢に就く。鼻息、雷霆の如し。是の夕、太宗、禁内に留宿す。将に五鼓ならんとして、周（同の誤り）廬者、寂として聞く所無し。帝已に崩ぜり。太宗、遺を柩前に受け即位す。暁に逮びて明堂に登り、遺詔を宣して罷む。声慟ず。近臣を引きて玉衣を環し、以て聖体を瞻す。玉色温瑩にして湯沐より出ずるが如し。

以上の後半部が「燭影斧声」として史上知られるもので、宮崎論文では「只普通には禁中においては行なわれそうもない何か只事でない奇怪な事件が遂行されたらしい探偵小説的な雰囲気を醸し出している」と述べられている。確かに太祖と太宗の二人だけでのはるか灯燭の下に望見されるふるまい、すなわち、太祖が「好做、頑張れ」と連呼しながら斧で雪を打ちたたくが如き様は、きわめて異様な光景と言わねばならない。実際には「この野郎」とばかりに太宗が太祖を斧で打ちすえていたのを、直筆をはばかり、上記の如く行為者を逆転させて言外に暗示したとも取り得る表現である。

次にやはり宮崎論文で引用されているものではあるが、『続資治通鑑長編』開宝九年十月条の太祖崩御に関する記事は

以下の如くである。

初め神の盩厔県民張守真に降る有り。自ら我は天の尊神、黒殺将軍と号す、玉帝の輔なりと言う。守真毎に斎戒して祈請するに、神、必ず室中に降る。風は肅然として声は嬰児の若し。独り守真のみ能く之を暁かにす。言う所の禍福、多く験す。守真、遂に道士と為る。上、不予たり。駅もて守真を召し闕下に至らしむ。壬子（十九日）、内侍王継恩に命じ、建隆観に就きて黄籙醮を設け、守真をして神を降らしむ。神言えらく、天上の宮闕已に成り、玉鍵開かる。晋王仁心有りと。言訖りて復た降らず。（原註。此れ国史符瑞志に拠り、稍や増すに楊億談苑を以てす。談苑に又た云う、太祖、守真の言を聞き、以て妖と為し、将に誅を加えんとす。会たま晏駕せりと。恐らくは然らざるなり。今取らず。）上、其の言を聞き、即ち夜に晋王を召し、属するに後事を以てす。左右皆な聞くを得ず。但、遙かに燭影の下、晋王時に或いは席を離れ、遜避する所の状有るが若きを見る。既にして上、釜（斧の誤りならん）を引拄して地を戮ち、大声にて晋王に謂いて曰く、好く之を為せと。（原註。此れ呉僧文瑩の為りし所の湘山野録に拠る。正史・実録並びに之無し。野録に云う。（中略）太祖の英武、其の達生にして知命は、蓋し此くの如き者有り。文瑩宜しく妄ならざるべし。故に特に此に著す。然るに文瑩の言う所の道士は姓名を得ず。豈に即ち張守真ならんや。或いは復た一道士なり。恐らくは文瑩、之を伝聞に得。故に審かならず。以下に蔡惇直筆、王禹偁建隆遺事を引くが省略する。）癸丑（二十日）、上、万歳殿に崩ず。

『長編』に李燾が原註として引用する諸書についてまず一瞥しておこう。成書の最も早いのは、淳化年間（九九〇―九四）に成ったとされる王禹偁の『建隆遺事』であるが、上記『長編』の原註中略部分で李燾が「蓋し禹偁は文章をもって天下に名たり。今伝うる所の遺事、語は多く鄙俗にして略ぼ禹偁平日の心声に似ず。云々。」と指摘するように、後人による仮託の疑いがきわめて強いものである。[6]『国史』符瑞志は、仁宗天聖年間（一〇二三―三二）に完成した『三朝国史』の符瑞志であろう。[7]『太祖、太宗朝史』は、真宗景徳四年（一〇〇七）に成っているから、これに次ぐ。楊億（九七四―一〇二〇）の『談苑』は、彼の没年以後、編者宋庠の没年たる治平三年（一〇六六）以前の成立である。[8]『長編』所引の『談苑』記事は

簡略であるが、南宋江少虞撰『皇朝事実類苑』により詳細な『談苑』の引用が見え、[9] これによって楊億が拠ったものが自ずから明らかとなる。この点は後述する。僧文瑩撰の『湘山野録』は熙寧年間（一〇六八―七七）の成立であり、上記諸書に次ぐ。[10] 太祖崩御に関して、本書の記述は他書に比して最も具体的、かつリアリステックな描写である。但、混沌ないしは真無と称する道士と太祖が関河（関洛の誤りならん）で出会うことが発端とされ、鳳翔府盩厔県民張守真は全く登場しない。上記李燾が「或復一道士也。」と言うように、楊億『談苑』とは、やや別系統の伝聞であるかの如くである。しかしながら、同じ文瑩の撰にかかる『玉壺清話』巻一に、太祖が北漢遠征の帰路、真定の龍興観道士蘇澄隠と会った時のこととして次のような話を載せる。

自ら言う。頃い亳州道士丁少微・華山陳摶と関洛に結遊す。嘗て孫君房麑皮処士と遇う。上問いて曰く、何の術を得しやと。対えて曰く、臣、長嘯引和の法を得たりと。遂に長嘯せしむるに、其の声清たること杳冥に入り、移時絶えず。上、嘿すること久しうし、低迷仮寝すること殆んど食頃。方に欠伸せんとするに、其の声略ぼ中断せず。上大いに之を奇とす。[11] 云々。

ここに云う長嘯引和の法をよくする道士蘇澄隠とは、『湘山野録』での混沌ないし真無と称する道士と同一人物であろうことは容易に推察できよう。

蔡惇『直筆』は、『長編』に数条の引用が見え、その最も晩い時期のものは、巻五二〇元符三年（一一〇〇）正月条であることから、少なくともそれ以後の成立ということになり、上記諸書中では一番晩れての成書である。その内容から考えて、『湘山野録』の系譜上にあることは明白である。

① 『郡斎読書志』巻三下小説類「湘山野録四巻。右皇朝熙寧中（一〇六六―七七）、僧文瑩撰、記国朝故事。」

② 『李太白文集』巻二五「題随州紫陽先生壁」詩「喘息飡妙気、歩虚吟真声」注「異苑、陳思王遊山、忽聞空裏誦経声、清遠遒亮。解音者則而写之、為神仙声。道士効之、作歩虚声。楽府古題要解、歩虚詞、道観所唱、備言衆仙縹緲輕挙之美。」

③ 五行説で金に配当される十干は庚である。猴は申、虎は寅で、寅月は正月である。頭四は言うまでもなく初四日である。太祖の受禅日が

建隆元年庚申歳正月四日であることを予言したものである。この種の予言や符瑞は、建国者に関するものを一般的とし、宋太祖に関しても、例えば『仏祖統紀』巻四三（T 49・394 a～）に数例が掲げられている。ところが、同書同条に太宗を宋朝開国の主とする符瑞が見え、本稿で後に詳論する点と少ならず関連するので紹介しておく。太平興国七年（九八二）に舒州で誌公石が発見され献上された。南朝斉梁期の神僧宝誌の予言を刻したとされる石で、「吾観四五朝後、次丙子、趙号太平、二十一帝、社稷永安」の文字が記されていたという（401 c）。丙子の歳（九七六）に即位して太平興国と改元した太宗を指すこと言うまでもない。帝位継承に関する疑惑を払拭するための政治的な演出であることは明らかである。この点については、竺沙雅章『中国仏教社会史研究』第六章「方臘の乱と喫菜事魔」（同朋舎　一九八二）参照。

④　元趙道一撰『歴世真仙体道通鑑』巻四七（『道蔵』洞真部記伝類・縮刷版第九冊六五七四―七五頁）混沌道士条にほぼ同文あり。『宋人軼事彙編』巻一太祖条にも引用され、「湘山野録」以上二条説郛本雲谷雑記、全同。今聚珍本雲谷雑記無此両条。或説郛誤文台書為渠書也。」と云う。

⑤　『玉海』巻一〇〇「建隆観、閶闔門（即大梁門、開封西門。）外、周世宗建太清宮。建隆初重修、改名建隆観。斎修率就是観。天禧四年正月十四日、幸建隆観。」

⑥　宋王明清撰『揮麈前録』巻三、徐規『王禹偁事迹著作編年』（中国社会科学出版社　一九八二）一七七頁以下等参照。

⑦　『揮麈後録』巻一「天聖中、章献明爾太后臨朝、詔修三朝国史。云々。」『文獣通考』巻一九二経籍一九史部正史類「三朝国史一百五十巻。晁氏曰、皇朝国史、紀十巻・志六十巻・列伝八十巻。呂夷簡等撰。初景徳中、詔王旦、先文元楊億等九人、撰太祖・太宗両朝史。至天聖五年、詔夷簡・宋綬・劉筠・陳堯佐・王曙正・李淑・黄鑑・謝絳・馮元、加入真宗朝史。王曾監修。曾罷、夷簡代。八年書成。計七百余伝。比之二朝実録、増者大半、事覈文贍褒貶、得宜百世之所考信云。」現行本『郡斎読書志』は大幅な節略有り。

⑧　『説郛』巻二一「楊文公談苑十五巻。故翰林楊文公大年、在真宗朝、掌内外制、有重名、為天下学者所伏。文辞之外、其博物殫見、又過人遠甚。故当時与其遊者、輒獲異聞奇説、門生故人往往削牘蔵棄、以為談助。江夏黄鑑唐卿者、文公之里人、有俊才、為公所重。幼在外舎、逮乎成立。故唐卿所纂、比諸公為多、但雑抄広記、交錯無次序、好事者相与名曰談藪。予因而掇去重複、分為二十一目、勒成一十五巻、輒改題曰楊公談苑。中書後閲宋庠序。」

⑨　『皇朝事実類苑』巻四四仙釈僧道、黒殺将軍条「開宝中、有神降於終南道士張守真、自言、我天之尊神、号黒殺将軍、与玄武・天蓬等列為天之三大将。言禍福多験。毎守真斎戒請之、神必降室中、風爾爾然、声如嬰児。独守真能暁之。太祖不予、駅召守真闕下、館于建隆観、令下神。神言、天上宮闕已成、王鎮開、晋王有仁心。言訖、不復降。太祖以其妖、将加誅、会晏駕。太宗即位、築宮於山陰、将塑像、請於神。神曰、我人形、怒目被髪、騎龍按剣、前指一星。如其言造之。六年宮成。封神為翊聖将軍。毎歳春秋、遣中使祈醮、立碑記其事。守真時来京師、得召見。至道三年春、太宗弗予、召守真至、令為下神。守真屢請、神不降帰、纔至而卒。後数日、宮車晏駕。此事異也。楊文公談苑。」なお『宋人軼事彙編』巻一太祖条所引「類苑引文公談苑」は大幅な節略がある。

⑩　『四庫全書総目提要』巻一四〇子部五〇小説家類一「湘山野録三巻続一巻。宋僧文瑩撰。（中略）其書成於熙寧中、多記北宋雑事。（中略）続録中、太宗即位一条、李燾引入長編、啓千古之論端。程敏政宋紀受終考、詆之尤力。然観其始末、竝無指斥逆節之事。特後人誤会其

詞、致生疑竇、是非作者本意、未可以為是書病也。云々。」『提要』のこの判断は明らかに乾隆帝の弑害説を全面否定する立場に沿ったものである。乾隆帝の事実無根説については、前掲宮崎論文参照。

⑪ 『玉壺清話』巻一「太祖征太原還、至真定、幸龍興観。道士蘇澄隠迎鑾駕、霜簡星冠、年九十許、気貌翹竦。上因延問甚久。自言、頃与亳州道士丁少微・華山陳摶、結遊于関洛、嘗遇孫君房麋皮処士。上問曰、得何術。対曰、臣得長嘯引和之法。遂令長嘯。其声清入杳冥、移時不絶。上嘿久、低迷仮寐、殆食頃、方欠伸、其声略不中断。上大奇之、因問引導之法、養生之要。隠対曰、王者養生、異於此。老子曰、我無為而民自化、我無欲而民自正。無為無欲、凝神太和。黄帝唐堯所以享国永図、得此道也。遂賜頤素先生。」蘇澄隠に関しては、曾鞏『隆平集』（四庫全書珍本二集）巻二招隠逸条にほぼ同系統の話しを載せるが、長嘯引和の法については全く言及されず、もっぱら養生の法のみである。蘇澄隠・丁少微・陳摶の三人は宋初の代表者な隠逸的存在で諸書に見える。特に陳摶は太宗の道教的傾向を示す例として引き合いに出される代表的人物である。本稿との関連で言えば、後述する『翊聖保徳真君伝』に、張守真に神が降言したなかで次のように言及する。「雍熙中、華山希夷先生陳摶卒於張超谷石室中。世多伝其羽化。守真朝礼之次、因焚香啓告曰、華山陳摶近卒、時人謂之尸解、未審其人功行証仙階乎、敢希上真、略賜指論。真君降言曰、摶之鍊気養神、頗得其要、然及物之功未至、但有所主掌爾。」ここには昇仙のための個人的修養よりも、民衆道教的立場が重視されていて興味深い。なお、陳摶に関しては前掲『隆平集』巻二同条、『宋史』巻四五七、『仏祖統紀』巻四三なども見える。また『歴世真仙体道通鑑』巻四七に三人の伝が立てられている。

二　翊聖保徳真君伝

さて本稿で検討しようとするのは、帝位継承をめぐる疑惑に関わる上記諸書よりも、その成立が確実に早い時期に属するもので、楊億『談苑』以下が言及する鳳翔府盩厔県民の張守真に関する記録についてである。張守真に神が降り、宋朝の社稷永図をはじめとする諸々の予言を下すという、この奇怪な一連の出来事を最も詳細に記すのが『翊聖保徳真君伝』（以下『真君伝』と略称）である。『真君伝』は、道教信仰にのめり込んでいく真宗の、その酷信が極まりつつあった大中祥符九年十月に、しかも真宗を道教尊崇にかりたてた実質的な中心人物と目せられる王欽若によって編集され、表上されたものである点に、まず注意しておかねばならない。① 『雲笈七籤』巻一〇三に所載される『真君伝』は、冒頭に真宗御製の序文がおかれ、次いで王欽若編集にかかる本伝記述がある。そして末尾に王欽若の「進翊聖保徳真君事迹表」と、それに対する真宗の批答を附す。② さて『真君伝』本文はきわめて長文にわたるので、以下の引用は本旨に直接関わる部分に極限

することにしたい。

建隆の初、鳳翔府盩厔県民張守真、終南山に遊ぶに因り、忽として空中に之を召す者有るを聞く。声甚だ清徹なり。守真驚懼して四顧するも見る所無し。黙行悚聴すること約数里、又た語を聞く。云う、汝先行せよ。吾即ち後に在りと。是の如きこと数日、守真能く測るなし。既に其の家に還る。又た室中に聞く。曰く、吾、命を受け霊を降せり。汝、何為ぞ頑梗此の如きや。吾が言を聴かざれば、吾、宋朝の大事を為さざるが若し。当に已に汝を粉砕すべしと。かくてようやく神言を聴く気になった守真に対して、神は次のような言を降す。

吾、是れ高天大聖玉帝③の輔臣、命を授けられ時を衛らんがため、龍に乗り世に降れり。但し正真の士に非ざれば、以て吾が教を奉ずる無し。汝、異骨有り、常流に類せず。汝、虔心に吾が道訓を奉ずべしと。

守真はこの神言になお疑念を抱き、鬼神の媒たる巫覡の如き賤職に甘じるを潔しとしない。そこで神はさらに云う。

吾、上天の神たり。鬼魅には非ざるなり。五嶽四瀆も、吾能く役使す。汝もし廻心入道し、香火を勤奉すれば、当に汝をして大国の徴命に応じ、真主の恩遇を受けしめん。豈に巫覡の輩と同じからんやと。

ここでまず神言の意図するところが暗示される。すなわち真主の恩遇を受けるであろうという真主とは、この時点では全く未定であるはずの二代目皇帝、実際には太宗の嗣位を予言しているのである。守真はようやくにして酒肉を以て神を祀らんとするが、腥穢だとして拒否され、供物には香茶・素食・鮮果のみを命ぜられる。次いで神言に云う。

吾、汝の天上の師たり。汝、別に人間の師有り。但、高士を訪ねて以て度を求めよと。守真乃ち古楼観先生梁筌に礼して師と為す。遂に居る所の側に於て隙地を求めて出家し、則ち北帝宮内に殿を立て、以て神に事う。日暮に崇奉し、頗る精至を極む。

守真は神言に従って現世での師として古楼観の道士梁筌について出家して道士となり、自宅に私設の北帝宮を建てて真心をこめてこの神を祀ることになる。ところで、守真が何故に楼観において出家したかは、本稿で最も問題としたい点と関

わるが、具体的には後述することにし、ここでは楼観が守真の居所である鳳翔府盩厔県に存する古来よりの道教聖地としてきわめて重要な位置付けがなされてきた道観であると指摘するに止めておく。続いて神は守真の崇奉ぶりをめでて、彼に邪悪を駆除する剣法の密儀を伝授する。これを受けた守真は忠実に実行し、あまたの徴験があったと云う。

乾徳中、太宗皇帝、方め晋邸に在り。頗る霊応を聞き、乃ち近侍を遣り、神幣香燭を齎して（北帝）宮に就きて醮を致さしむ。使者斎戒して焚香す。告して曰く、晋王久しく霊異を欽しみ、俸緡を備えて殿宇を増修せんと欲す。仍って表もて宮名を勅賜せられんことを乞うと。真君曰く、吾将来に太平君宋朝第二主に運り値い、上清太平宮を修し、十二座の堂殿を建てんとす。三界中の星辰を儼かにするに自ら時日有り。容易に言う可からず。但、我が為に大王に啓して言え、此の宮観は上天已に増建の年月を定めり。今なお未だ可ならずと。使者帰りて以て聞す。太宗驚異して止む。

いまだ晋王であった太宗の北帝宮増修の願いに対する神言は、「太平君宋朝第二主」とより具体的な太宗嗣位を予告するものになっている。

太祖皇帝素より之を聞くも、未だ甚しくは異を信ぜず。遣使し香燭青詞を齎し、宮に就きて禱を致さしむ。守真を召し闕に詣らしめ、備さに其の事を詢ぬ。守真具さに之を言う。且つ曰く、精誠懇至に非ざれば、其の神を降す能はずと。仍って上聖の降霊事迹を以て聞奏す。太祖、小黄門を召して側に長嘯せしめ、守真に謂いて曰く、神人の言や此の若きかと。守真曰く、陛下もし臣を妖妄と謂はば、乞うらくは按験して臣を市に戮するを賜はれ。斯言を以て上聖を褻黷すること勿れと。守真に詔して、建隆観に止む。翌日、内臣王継恩を遣りて観に就きて醮を設く。時を移すも未だ聞く所有らず。継恩再拝して虔告す。須臾にして真君言を降して曰く、吾乃ち高天大聖玉帝の輔臣なり。蓋し符命に遵いて降り、宋朝社稷を衛り、来りて遐長の基業を定む。固より山林魑魅の類には非ざるなり。今乃ち小児をして呼嘯せしめ、以て吾が言に比ぶ。斯れ不可と為す。

ここに述べられる太祖の神に対する態度は、明らかに太宗のそれとは異なり、非礼ぶりが強調されていることに気付く。とりわけ宦官に長嘯させて神言と比較するに至っては、神に対するこれ以上の冒瀆はないといった意すら感じさせる。太祖と太宗の神言、ひいては張守真に対するこのような態度の違いを際立たせるのは、「真主」として太宗の嗣位を正当なものに強く印象付けるための伏線であることは明らかであろう。

ところで、宦官が長嘯して神言を模倣するくだりは注目に値いする。すなわち、神言があたかも声帯が変質してメゾソプラノとなる宦官の発声と瓜二つであったわけである。それはともかくとして、『湘山野録』に記す道士混沌（真無）の「善歌歩虚為戯、能引其喉於杳冥間、作清微之声」、あるいは『玉壺清話』に記す道士蘇澄隠の「長嘯引和之術」といった道士の特殊な修練に基づく発声法を改めて想起する必要がある。④『真君伝』に集成されている一連の神言が、張守真自身かどうかは別にして、「長嘯引和之術」をよくする道士によって作為された可能性が考えられるからである。

神言はさらに続いて云う。

汝ただ説きて官家のために言上せよ。天の宮闕已に成り、玉鑠開かる。晋王は仁心有り。晋王は仁心有りと。凡そ百余言なり。継恩惶懼し、敢えて隠さず、具さに録して以て奏す。

この部分が神言の最も重要なくだりである。建隆初め以来、下っては至道年間にまで及ぶ一連の神言は、この部分のための伏線であり、また験迹以外の何ものでもない。太祖の崩御が天上において既定であり、それ故にこそ未定の帝位継承者として太宗を指定するところの、きわめて露骨な太宗嗣位の予言である。先にふれた『長編』所引の『国史符瑞志』や楊億『談苑』等が拠ったところのものが『真君伝』であることは、もはや明らかであろう。王継恩の報告はさらに続く。

因りて復た面言す。神音は歴歴たり。聞く者兢悚すと。太祖黙然として之を異とす。時に開宝九年十月十九日の夕なり。翌日、太祖升遐し、太宗嗣位す。尋いで守真を召し、瓊林苑に於て周天大醮を為し、延祚保生の壇を作らしむ。

このくだりもあまりに出来すぎの感を抱かざるを得ないのであって、作為の迹、歴然たるものが認められる。さて、この

予言が建隆観で下されたのが、太祖崩御の前日である開宝九年十月十九日（壬子）の夕であった。翌二十日（癸丑）の崩御直後に帝位に即いた太宗は、ただちに王継恩に命じて答謝のための醮祭を開封西門順天門外の瓊林苑⑤において行なわせたところ、あらためて「民を愛し国を治むること前代に勝る。万年の基業、永長に新たなり」という神言が下される。これをうけて太宗は、この神を祀るべき宮観の建立を命じる。

尋いで内供奉官王守節・起居舎人王亀從を遣り、終南山の下に就きて宮を築かしめんとす。方に地を終南鎮に卜す。真君忽として降り、亀從等に言て曰く、此の地乃ち上帝の宮闕を修建する地にして、易う可からざるなりと。是に於て乃ち定まる。凡そ三年にして宮成る。中正の位、四大殿を列ぬ。前は乃ち玉皇通明殿、次は紫微殿、次は七元殿、次は真君所御殿。東廡の外、天蓬・九曜・東斗・天地水三官の四殿有り。西廡の外、真武⑥・十二元神・西斗・天曹の四殿有り。又、霊官堂・南斗閣有り。並びに星宿諸神の像を列ぬ。鐘経二楼を竪て⑦、斎道の堂室、完備せざるはなし。碑を建て以て其の事を紀す⑧。題して上清太平宮と曰う。（中略）毎歳三元及び誕節上本命日、並びに中使を遣りて醮を致さしむ。祀神の夕、上、望拝す。歳或いは水旱、或いは国家将に事を挙げんとすれば、率ね禱を致せり。

太宗の勅命により荘麗な道観が神が降った地、つまり張守真の居所たる鳳翔府盩厔県終南鎮の終南山北麓に造営され、かつて乾徳中の予言に従って、上清太平宮と名付けられたのである。『真君伝』のここの記述は、『長編』巻一八太平興国二年（九七七）二月庚辰条の「詔して鳳翔府終南山北帝宮を修せしむ。宮は即ち張守真の築きて以て神を祀る所の者なり」とあるのに対応する。

『真君伝』はさらに続けて、太平興国初めの太宗による北漢親征（四年の北漢併合による全国統一の完成）に際して戦勝の予言が下されるとともに、神前での戦勝後の告謝に対し、「国祚延遠たること、有唐に過ぐ」との嘉言が下される。同六年、張守真の請により、神に翊聖将軍の号が勅賜される。「玉帝の輔臣の輔翊する所の者は上帝なり」という太宗の意に基づく封号である。この封号は、やはり『長編』巻二二太平興国六年（九八一）十一月壬戌条に「詔して太平宮の神を封じ

て翊聖将軍と為す。道士張守真の請に従うなり」とある記事によって、事実であることを確認できる。[9] 同七年には、張守真に崇玄大師の号が賜わる。至道初年（九九五）、神は守真に次のような言を下す。

今基業已に成れり。社稷方に永からんとす。承平の世、将に継いで明君有り。吾已に期有り。天上に却帰せん。汝等復た吾が言を聞かず。もし国家の祈禱、但、厳潔に焚香し、北面して告さば、言を降さずと雖も、当に福を受け、宗社を衛護すべしと。

太宗末年に下ったとされるこの神言は、道教側にとってはまさしく「明君」たる真宗嗣位を示唆するとともに、『真君伝』の編者王欽若による現皇帝真宗に対する配慮が読みとれる。ついで神言は、張守真の現世での役割が終り、彼を天上に迎える旨を伝える。つまり、神言がもはや下されないからには、その媒介者たる守真の存在は不要となるからである。かくて至道二年（九九六）閏七月十六日、守真は遷化する。太宗の崩御が翌三年三月であるから、それに先んずることわずかに八ヶ月である。守真の死と太宗崩御との時間的近接は言うまでもなく遇然事に過ぎないが、『真君伝』では、「神言復た下らず」以下、二人の死を一連の出来事として叙述する。後に詳述するように、太宗の嗣位と在位治政期を正当化する意図がここにも容易に読み取ることが出来よう。『真君伝』はさらに真宗期における尊崇にまで言及する。大中祥符元年、宮中承天門に天書が降ったのを契機に、泰山封禅、汾陰后土のまつりなど真宗の道教への没入が顕著になっていくのは有名である。この天書を奉安するため、同七年（一〇一四）に七年の年月と莫大な経費を投入して、開封皇城西北の地に玉清昭応宮が完成する。この宮内の宝符閣西北隅に凝命殿が造営され、殿後を凝命閣としてこの神が祀られることになる。[10] 同年、恐らくは凝命閣への奉安と同時と思われるが、この神に改めて翊聖保徳真君の号が勅賜される。

『真君伝』では、さらに以下に真君の建隆以来の霊験を具体的に記述するが、省略に従いたい。

以上、『真君伝』の内容を長々と見てきたが、先にもふれたように、この編纂時期が真宗の道教への過度の没入という時代的雰囲気を芬芬とさせるものであることが知れよう。『真君伝』の内容が、神言に対する太祖と太宗の対応をきわめ

て対称的に叙述していること、太祖崩御直前における奇怪な予言、太宗嗣位後の異常な尊崇ぶりなどを特徴とするものであることを改めて強調しておきたい。さて『真君伝』が編集されたのが真宗期である点は、一定の考慮に入れておかねばならないが、編集時に基づいたと考えられる典拠が、すでに太宗期に存していることを次章で検討することにしよう。

① 『長編』巻八八大中祥符九年冬十月巳卯条「王欽若表上翊聖保德真君伝三巻、上製序。」『郡斎読書後志』巻二伝記類「翊聖保德真君伝三巻。右皇朝王欽若撰。建隆初、有神降于鳳翔府民張守真家。開宝末、徵守真詣闕。属太宗践祚、封神翊聖将軍、築宮於終南山。祥符中、詔欽若、編次其事、御為製序引。」

② 『道蔵』正乙部所収。縮印版第三八冊三〇一七七―九二頁。ちなみに、張君房撰にかかる『雲笈七籤』一二二巻の成立は、『真君伝』表上直後の天禧三年（一〇一九）頃である。

③ 高天大聖玉帝は、真宗期以後に道教諸神中で最高位に置かれ、かつ宋朝の最高守護神とされる昊天玉皇大帝と同一神であろう。（正式の尊号は、大中祥符八年の太上開天執符御暦含真体道玉皇大天帝で、徽宗政和六年には、さらに昊天の二字が加えられる）。だとすれば、真君がこの最高神の輔臣と位置付けられるのも真宗期以後のこととなる。後述するように、咸平二年建立の張守真「行状」碑には、北天大聖玉帝の輔臣として見え、さらに張守真が真君を祀るために建てた祠を北帝宮と称していることから、真宗初期（恐らくは大中祥符以前）においては、天上の一方を支配するきわめて高位の神格ではあっても、いまだ全天の最高神格視されてはいないものと考えられる。なお、宋の諸帝の玉皇神仰については、山内弘一「北宋の国家と玉皇―新礼恭謝天地を中心に―」（『東方学』六二　一九八一）参照。

④ 僧文瑩が記すのは、ともに道士の「長嘯引和之術」、「歩虚歌」であって、長嘯に似たとされる神言には全く言及していない。伝聞過程での分化の結果とも考えられるが、もう一つ考えられるのは彼の意図的な無視という方向である。彼は『真君伝』の表上から約半世紀後の人物であり、先帝真宗の御製序まで冠せられた『真君伝』の存在や内容を全く知らなかったとは考え難い。にもかかわらず、神言に全く言及することなく、太祖崩御を長嘯術をよくする道士とからめて記述している点に、仏教者の道教に対する一種の宗教的反撥があったのではないかと思われる。後述するように、この神は太宗朝以後、特別な庇護のもとに新建の上清太平宮に祀られ、この地の楼観派道教再興のきわめて重要な担い手となるのであって、仏教的立場からすれば決して好ましい情況ではなかったはずであるからである。

⑤ 『東京夢華録』巻七「三月一日開金明池・瓊林苑」条「三月一日、州西順天門外、開金明池・瓊林苑。云々。」同巻七「駕幸瓊林苑」条「駕方幸瓊林苑、在順天門大街西北、与金明池相対。大門牙道、皆古松怪柏、両傍有石榴園・桜桃園之類。云々。」

⑥ 真君所御殿・天蓬殿・真武殿は、前掲『皇朝事実類苑』所引の楊億『談苑』に天の三大将軍として黒殺・天蓬・玄武将軍をあげているのに対応する。

⑦ 後述するように、鐘楼には唐代に楼観にあった鐘を移置し、経楼には新修の道蔵が蔵せられた。

⑧ 後述する「終南山上清太平宮碑銘」である。

⑨ 『宋大詔令集』巻一三五典礼二〇天神上の「封翊聖将軍詔」に「太平宮神、稟命上元、降霊下土。芝芬致薦、胙籩有聞。庇我烝民、壓垂

景貺。宜加美号、用答神休。其封神為翊聖将軍。」とあるのは、『真君伝』をそのまま引いたものである。

⑩『長編』巻八三大中祥符七年十月癸未朔条「加号翊聖将軍曰翊聖保徳真君。」『宋大詔令集』巻一三六神下に掲げる「加号翊聖保徳真君詔」は、やはり『真君伝』をそのまま引いたものである。ところで、太祖崩御から太宗即位に至る一連の出来事に関して、この件を最も具体的に叙述する『真君伝』を『長編』が全く引用せず、もっぱら野史類に拠っているのは、いささか不思議である。恐らく『長編』が引く『国史』符瑞志が『真君伝』と同系統の記録であったからではないかと考えられる。

三　上清太平宮碑と伝応師法行状碑

『金石萃編』巻一二五に録文の見える正奉大夫行給事中直学士院上柱国賜紫金魚袋臣徐鉉奉勅撰の「重刊終南山上清太平宮碑銘并序」は、太平興国五年(九八〇)四月九日の建立にかかるもので、真君と張守真、及び真君の奉安道観である上清太平宮に関する最も早い時期の記録であり、『真君伝』に「碑を建て以て其の事を紀す」とあった、まさにそのものに他ならない。本碑には上清太平宮建立の由来が具体的に見える。①

(上略)我が国家、天の命を受くること、日の昇るが如し。六気を御して泰階を平らげ、大明を麗して万国を照す。乱略を百王の季に清め、淳風を遂古の初めに返す。天瑞は祥を呈し、群霊は職を受く。ここに御暦の元祀、神の鳳翔府盩厔県の望仙郷に降る有り。其の象は形ならず、其の言や紀す可し。蓋し玄帝の佐命、禹強の官連たり。真位は紫微に参じ、霊職は井鉞に分たる。其の称述は則ち濡玄の奥旨、其の敷演は則ち禳禬の厳科なり。教義は深にして則ち孝友姻睦の行興る。威力は大にして則ち蜩蛹魑魅の害除かる。是れ由り秦雍の地、尸して之を祀る。

ついで太祖の英武明徳をたたえた後、太宗に対するさらなる顕称が記される。

今皇帝、千年運に応じ、二聖明を継ぐ。大業を恢めて惟れ新しく、深仁を浸はせて累りに哈ねし。(中略)深く肸蠁を惟い、益ます昭明を驗ぜらる。而るに豊報未だ厳ならず、寿宮度せられざるは、景貺を光敷し、方来に垂示する所以に非ず。夫の庸庸祇祇は為政の要、玄玄本本は致理の端なり。蓋し神の命は天より授けられ、天の造は道より始まる。

是をもって誠を衆妙に帰し、制を昭台に訪ぬ。福郷に申画し、ここに仙館を崇くす。緬かに虚皇の真境を惟い、参ずるに聖暦の嘉名を以てす。詔して上清太平宮を降りし所の地に立つ。

このように、本碑には上清太平宮建立の地が神降の盩厔県望仙郷と具体的に記される。[2] ついで、この地が南は終南山に対し、北には渭水の流れを望む勝景の地であるとともに、「鮮原は靡迤として、漢皇訪道の台に接す。佳気は鬱葱として、関令修真の宅に対す」として、道教的雰囲気の充満した道観建立に最もふさわしい立地であることを云う。関令尹喜が西行途次の老子から道徳二経を授けられた授経台、そしてその地に最初の道観として楼観が建立され、秦始皇や漢武帝をはじめ歴代の尊崇をあつめてきたと伝えられる、古来からの道教一大聖地楼観の存在に言及されていることに注目したい。以下、新建された上清太平宮の荘麗さとその霊験をたたえる記述で本碑は終る。さて、簡単に本碑内容を紹介したが、注目せねばならない点をいくつか指摘できる。本碑は太宗の勅を奉じて徐鉉が撰述したものであること、つまり、上清太平宮建立それ自体が太宗の直接的な命に基づくものであることがまず確認できる。また徐鉉による奉勅撰という点も看過できない。徐鉉は南唐出身であるが、宋初にあってはその文才をもって著名であった。同時に彼は太宗末至道二年（九九六）に、宋としては最初の大規模な道蔵整理事業に中心的役割を果しているという、道教的側面に注目したい。[3] 言うまでもなく、宋代で最も著名な道蔵整理は、真宗期に王欽若が中心となって行ったものである。王欽若が真宗の道教酷信の演出者であったことは広く知られているが、太宗と徐鉉との関係においても、徐鉉の道教教義に対する造詣深さが両者を結びつける一つの因となっていたと考えられないであろうか。また真宗期に下賜せられた道蔵が上清太平宮に蔵せられていたことが知れ、[4] その低からざる地位を示すものと言えよう。ところで、本碑には張守真については一言半句の言及も見られないのはやや奇異な感がするが、張守真に関しては『金石萃編』巻一三四著録の「聖宋伝応大法師行状」碑が詳細に彼の行状を記し、大いに参考となる。この行状碑は、張守真の弟子二十一人によって真宗初めの咸平二年（九九九）六月二十二日に刻石された行状本文の前半部と、半世紀後の仁宗皇祐二年（一〇五〇）五月二十五日に上清太平宮関係者によって重建さ

れた後序部分とに分れる。まず前半部の行状本文を見ることにする。

法師、姓は張氏、諱は守真、字は悟元。後漢の三天正一扶教大法師は、迺ち丞相留侯六代の孫たり。法師は即ち子房の遠裔なり。真嗣夐延して厥の居を常とせず。今、盩厔の人と為るなり。

後漢期の原始道教教団五斗米道の教祖たる張陵が、前漢創業期の功臣張良（字子房）の子孫であるという説は、南北朝期における三張道教の発展過程で形成されてくることは周知のことである。ここに張守真を張良、張陵の子孫と称するのは、言うまでもなく同姓付会による道教的権威づけである。⑤

壮ずるに逮び、嘗て終南山に遊ぶ。上聖の空中より降るに遇う。曰く、吾、北天大聖玉帝の輔臣なり、命を授けられ時を衛らんがため、龍に乗り世に降れり。正直英傑の士に匪ざれば、以て古道を振うなし。汝、異骨有り、殆ど凡庶に非ず。夙に真教に叶う、吾が教を受く可しと。

これだけの引用からだけでも、『真君伝』とほとんど同一内容であることに気付こう。行状碑は続けて、酒肉供物の拒否、守真が巫覡の如き存在となることへのためらいを記し、「吾、運りて本朝第二主を化し、将に玄闕を建て十二座の殿宇を置き、中外界星辰を列ねんとす」という神言に及ぶ。明らかに太宗への符命を示唆した記述を確認できるのである。ついで人間での師を求めよとの神言により、張守真が古楼観主梁筌の下で出家すること、終南県の私第の傍に北帝宮を築き神像を奉安したこと、神意を体した張守真が諸々の妖魔を駆除してこの地に安寧をもたらし、彼が通霊先生張黒殺と称せられたことを記す。『真君伝』に神の自称として黒殺将軍とあったが、その基づくところはこれである。守真が自ら造って北帝宮に安置した神像が黒衣であったことによる。⑥

開宝九年十月三日、太祖の召命をうけて盩厔を発ち、十日に開封に到った守真は、神異について下問される。

上、法師に謂いて曰く、真君の言を降せるは此に類する有りやと。対えて曰く、若し陛下、之を信ぜざれば、臣を棄市せられよ。験ずべくんば、人声を以て上聖を媟嬻すること無かれと。帝之を然りとして曰く、果して正直の□なり

と。即日、詔して建隆観に憩わしむ。十九日、太祖上僊せらる。二十一日、太宗皇帝統を嗣がる。法師に瓊林苑に醮を命じ、上帝に謝す。

問題の「天の宮闕已に成り、玉鑠開かる。晋王仁心有り」という直截的予言には言及しないものの、太祖の神に対する非礼は明記され、太祖崩御から太宗嗣位の間の微妙な事情が示唆的に述べられている。次いで太宗期における上清太平宮建立以下の手厚い庇護が記される。

太平興国二年春、起居舎人王亀従・内供奉王守節に命じ、終南山に赴き、慎しんで勝地を選び、上清太平宮を構立せしむ。衆議未だ決せず。時に真君降りて曰く、北帝宮の甫近、殊庭を建つ可しと。是により以て定む。（中略）三周歳に迫んで始めて厥の功を僝す。⑦（中略）及び県官の邸店を賜うこと数百楹を越ゆ。日利を匊て以費に充つ。法師、前後の錫賚、咸な賈易して田園を創ること万畝のみならず、立てて常住と為す。其の経営、後世匱しきこと弗きは、実に法師の力なり。宣命して卒百人を給し、法師の駆役に供す。（中略）

三年（九七八）冬十月、聖寿の儀を修祝せしむ。⑧（中略）

六年（九八一）十月、御前に師号を賜い、崇玄大師と曰う。

七年春正月、入内高品盧文寿、中悁（涓の誤りか）もて本宮の祈禱を委ねられ、用て宗社を安じ、兆民を康かにせんことを楽う。法師、普天大醮を設く。威儀具陳し、寔に常には非ず。真君霊を降す。迺ち感応を録して聞奏す。上、社稷に頼有るを知り、尤も虔奉を加えらる。⑨

雍熙中（九八四―八七）、（中略）勅して京城東南隅に霊宇を剏き、以て之（太一神）を宅す。亟かに法師を召し、太一・真君を醮請せしむ。上謂いて曰く、卿に非ざれば、何を以てか神化に感通せんと。礼畢りて還る。⑩ 淳化五年（九九四）冬、鳳翔府管内道正を制授せらる。蓋し其の教を尊厳すればなり。皇朝凡そ七たび圜丘を祀るに、必ず法師に詔して法駕に導従せしむ。（中略）

法師凡そ国家の為に二百余醮を設け、三百余斎を修し、宣救三十余道を授けらる。居ること一日、門人を召し、謂いて曰く、吾、怪魅を誅翦するの功あるも、飛昇を修錬するの妙を虧く。（中略）然り而して質は遷殞すと雖も、神は自ら帰する有り。上帝、吾の物に及ぼすの勲を録し、已に符命を領し、五土の主を授けられたり。汝ら必ず能く教風を恢継し、天に願に違うこと弗れと。遽かに蘭湯を命じ、日ごとに三浴し、徐ろに清泉を飲むこと斗余、衣を易え手足を啓示す。至道二年（九九六）閏七月十六日を以て委蛻して化す。享年六十有六なり。（中略）法師、古迹宮観を重修すること三有り。鋪叙飛奏し、各おの名額を賜う。（下略）

以上が「行状」碑本文の概要である。守真の晩年に関してはかなり詳細である点を除けば、『真君伝』と完全に一致する内容であることはもはや明らかである。行状末に、守真の子元済が本行状を録して聞したところ、聖旨により史館に付されたとある。[11] その行状原本は長文のより具体的かつ詳細であったと思われる。本「行状」碑は、石刻のために恐らくは大幅な節略がなされているはずである。つまり、史館に蔵せられた行状原本が、『真君伝』編纂作業時においてきわめて重要な典拠とされたことはほぼ確実である。

次に皇祐二年（一〇五〇）重建時に加えられた後序を見よう。ここには張守真没後の真宗・仁宗期における追贈号等、及び重建のいきさつを記す。彼の遺骸は没後十年を経て、景徳二年（一〇〇五）八月に書台郷郭堡社に改葬される。[12] 大中祥符七年（一〇一四）、翊聖将軍を改めて翊聖保徳真君の号が賜わることは、既述の諸書と一致する。仁宗が即位すると、「今上秉籙せられ、嘗て琅函を閲す。因りて翊聖伝記を覧し、頗る睿念を動かさ」れた結果、景祐年間（一〇三四―三八）に、張守真に伝応大法師号が追贈される。従って、本「行状」碑の題額「聖宋伝応大法師行状」は、重建時に冠せられたことになる。ちなみに、北宋末に勅命によりさらに二字を加えた伝応通妙大師号を追贈されている。[13] 最後に重建の由来として、本碑の剝落を嘆じた司竹監殿直の張君簡[14]が自費を投じて重刊したことを記す。末尾に重刊関係者十一名を列挙する。道教関係者と明確に判るのは、住持延生観賜紫閣知白、住持資聖宮賜紫張知常、住持順天興国観賜紫張徳安、内住持順天興国

観賜紫王全矩、住持資聖宮賜紫蘇宗晏、上清太平宮副宮主賜紫尋宗邈、上清太平宮主凝和大師賜紫劉子翔の七人である。上清太平宮の宮主・副宮主は直接の関係者であるから、ここに名を列ねるのは当然であるが、他道観の道士がいかなる関係を張守真ともつのであろうか。この点を含めて、次章で検討することにする。

① 『徐文公文集』巻二五にも「大宋鳳翔府新建上清太平宮碑銘」として著録する。『古墨鏡華』巻五では、本碑について「有神降于鳳翔、本無稽之言、而侈大之、其天書之前茅乎。徐常侍文纖靡、直是五季遺習。張振書亦拖沓、不堪与孫承望雁行。」と云い、太宗期における上清太平宮に与えられた政治的、歴史的意味には全く気付いていない。

② 宋敏求『長安志』巻一八盩厔県条に宋代の管下十七郷を掲げ、その一に「望仙郷、在県東四十里、管社一十四」と見える。

③ 『混元聖紀』巻九（『道蔵』洞神部譜籙類　縮刷版第三〇冊二三八五一頁）「初太宗嘗訪道経、得七千余巻、命散騎常侍徐鉉・知制誥王禹偁校正、刪去重複、写演送入宮観、止三千三百三十七巻。」『文献通考』巻二二四経籍考五一子部神僊家条「宋三朝国史志曰、（中略）宋朝再遣官校定、事具道釈志。嘗求其書、得七千余巻、命徐鉉等讎校、去其重複、裁得三千七百三十七巻。」

④ 『集註分類東坡先生詩』巻四釈老上「読道蔵」詩に附す趙堯卿註に「終南県有上清太平宮、宮有道蔵、先朝（真宗）所賜書也」と見える。また陳国符『道蔵源流攷』「歴代道書目及道蔵之纂修与鏤板」条一四四頁以下参照。

⑤ やや後の例であるが、『太平広記』巻六神仙六張子房条に杜光庭撰の『仙伝拾遺』を引き、「子房登仙、位為太玄童子、常従老君於太清之中。其孫道陵得道、朝崑崙之夕、子房往焉。」と見える。『真君伝』末には「張守真子元済、常斎戒詣宮。真君降言曰、汝父守真、遭逢於我、故令子孫受福、汝豈不聞、信州龍虎山張道陵、至今子孫不絶、亦逢於上聖、得道之後、応及後世、汝亦於吾有緣、直須在家孝於父母、食禄忠於帝王、立身揚名、豈非好事」と見え、張天師の後裔であるとする「行状」碑に比してあいまいな表現に変られている。

⑥ 清王文誥輯註『蘇軾詩集』巻三（中華書局　中国古典文学基本叢書一九八二）「壬寅（嘉祐七年）二月、有詔令郡吏分往（鳳翔府）属県減決囚禁、云々。」詩に「秘殿開金鎖、神人控玉虬、黒衣横巨剣、被髪凜雙眸」の句が見え、劉藻の註に「翊聖像、皆被髪跣足、伏剣擾龍、相承旧矣」と云う。

⑦ 太平興国二年二月五日（『長編』）に着工して三年で完成したのであるから、同五年のことになる。「上清太平宮碑銘」の建立が五年四月とあったから、それは上清太平宮の完成時に建碑されたことが知れる。また『真君伝』記述とも一致する。

⑧ 楊万里『揮麈録』巻上「太宗、十月七日生、為乾明節、後改為寿寧節。」

⑨ 太平興国六年・七年の記事は、「行状」碑と『真君伝』とでは相前後する。

⑩ 『長編』巻二四太平興国八年五月丁巳条「司天春官正襄城楚芝蘭上言、京師帝王之都、百神所集、今城之東南一舎而近有地、名蘇村、若於此為五福太一作宮、則万乗可以親謁、有司便於祇事、何為遠趨江本、以蘇台為具分乎。議者不能奪。丁卯、詔従芝蘭議、徙建太一宮於蘇村。東上閤門使楽陵趙鎬督其役、仍令芝蘭及枢密直学士張斉賢同定祭法。」また『玉海』巻一〇〇「太平興国太一宮」条参照。

⑪「有子曰元済、業進士。法師朝覲奏名、敕賜同学究出身。後調選、録法師行状、以聞。奉聖旨批附史館。布衣張濤集事跡、門人刻石、立于真堂之右。」子の元済が同学究出身を賜わって官僚化しているのは注目に値いする。同学究出身は諸科中でも最も受験が容易とされるものであるが、皇帝の恩寵が子にまで及んでいるのである。これは特奏名の一種かと思われる。

⑫『長安志』巻一八盩厔県条「書台郷、在県東三十里、管社一十七。」上清太平宮のある望仙郷の西隣に当る。本宮の規模から考えて、その境内の一画であろう。

⑬許翰『襄城集』巻三（四庫全書珍本初集）「伝応法師張守真加通妙二字勅」。

⑭『長安志』巻一八盩厔県条「司竹監、在県東南三十里。」『蘇軾詩集』巻三「壬寅二月決囚経歴」詩自註「県有官竹園、数十里不絶。」同巻五「司竹監燒葦園、云々」詩査註「宋時惟鄠・盩厔一監、在鳳翔。」司竹監は上清太平宮と至近の地にある。張君簡は同姓であるが、同族か否かはこれだけでは全く不明である。

四　張守真、上清太平宮と楼観の関係

楼観は、盩厔県に存する、古来より道教の聖地とされる道観で、上清太平宮とは至近の距離にある。そもそも楼観の由来は、老子が西行し来るのを紫気を望じて予知した関令尹喜が、当地の自宅に招いて道徳二経を授けられたのに始まる。その意味で楼観は道教発祥の地と目せられることになる。「上清太平宮碑」にも言及されていたように、秦始皇や漢武帝以下、歴代帝王の尊崇をうけて増修が加えられてきたと云う。しかし、このような楼観の由来は後世に順次作り上げられてきたもので、その存在を史料的にある程度確認できるのは、せいぜい西晋末である。しかも、その後の南北朝になるとほとんど不詳となり、北周末・隋代に至って再び一定の姿を浮び上らせる。ついで唐代の楼観史はかなり具体的に明らかとなる。唐室のきわめて厚い尊崇と国家保護を得て、すでに高祖期に宗聖観という観額を賜い、荘大な規模を誇る道観に発展するだけでなく、楼観派として道教の一大宗派的存在にまでなる。老子を遠祖とする唐室李氏の道教保護策といった一般的理由はともかくとして、唐の創業期に、楼観がきわめて重要な役割を演じたことが一つ大きな理由として挙げられる。唐高祖李淵が太原で挙兵して長安に入城する、創業の最も早い段階で、楼観がしかるべき意図を抱きつつ、物心両面においてきわめて積極的に李淵集団に加担したことが、唐一代を通じて、楼観に対する唐室の保護の基礎となっている。

さらにその立地が長安西郊の至近に位置したことも大いに幸いしたが、当地が特異な道教的な宗教雰囲気に満ちた地域であったことも、楼観隆盛の一因として数えることが出来る。宋代の楼観については、蘇軾らの題刻に散見するだけで、道観としてのあり方等はほとんど不明である。金代に全真教が興り、教祖王重陽修真の地として当地は祖庭と称せられ、全真教の中心的聖地となる。そして祖庭に近隣する楼観は、全真教教義に組み込まれた形で、あらためて道教発祥の聖地として重要な地位を占めることになる。[1] 元代にも引き続き全真教隆盛の下で楼観は宗聖宮と改称され、元朝の国家保護を享受していることが知れる。[2] このように、唐代から元代までの楼観についてはある程度明らかにし得るのであるが、北宋期だけがほとんど不詳であった。上清太平宮の存在は、楼観との関係を解明することにより、この楼観史の空白を埋めることにもなろう。

さて、張守真と楼観の関係は、人間の師を求めよという神命に従って、楼観道士梁筌について出家したことに始まる。それ以後、さまざまの形で常に関係が存し続けることになるが、その点を具体的に見てみよう。端拱元年（九八八）七月九日の刊記のある「上清太平宮鐘記」は、唐代には楼観にあって、その後他所に移されていた鐘を、張守真の請によって勅許を得、上清太平宮に移置したことを記したものである。[3] 移置年月は太平興国五年閏三月三日とあるから、同年四月九日建碑にかかる「上清太平宮碑銘」の直前、すなわち、上清太平宮完成時直前のことである。本鐘記は奉勅撰である点を考慮に入れねばならないが、太宗顕賞が著しく目につく。あたかも創業の主であるかのごとき、あるいは道教教理にのった政治方針等の讃美が羅列され、太宗の嗣位が天命・神命に基づくものであることが強調される。[4] 鐘とは道観のいわばシンボルであり、楼観の鐘が上清太平宮に移置されたことの意味はすこぶる重要である。つまり上清太平宮が楼観系の道観であることを明確に宣言したことに他ならない。

この鐘記と同年の端拱元年十月十八日の教牒によると、やはり張守真の請によって、楼観を改めて、順天興国観の観額が賜わる。[5] 楼観名は古来からの一般呼称で、唐代には正式には宗聖観と称したことは既述した。

宋代での正式名称は、太平興国三年（九七八）に興国観と改称し、[6] ついでこの度の順天興国観への改称となったのである。順天興国という観額は、太宗の楼観に対する少なからざる関心を示すものとして注目すべきである。何故なら、上天の神意に順った帝位継承、我こそは実質的な開国の主であるとする太宗の意識が如実に反映していると言えるからである。[7] その意味からすれば、この観額はむしろ上清太平宮にこそふさわしいものであろう。それにもかかわらず、楼観にこの観額が賜わったのは何故であろうか。張守真を媒介者に仕立て上げ、太宗嗣位の正当性を真君の神言という形によって宗教的に合理化した張本人が楼観であったとすれば、楼観をめぐる上清太平宮、張守真の複雑な諸関係は明解な説明がつくであろう。太宗が抱いたと思われる楼観に対する強い関心も全く同じ脈絡で説明できよう。『真君伝』冒頭部で、真君が張守真に与える最初の具体的教示として剣法と結壇の法を記す。結壇の法とは、国家のための上三壇、臣寮のための中三壇、士庶のための下三壇の計九壇の祭祠壇に関するもので、このうち、国家のための上三壇中、最上壇を順天興国壇と称し、ここで普天大醮を行うと云う。楼観の観額が、真君の言う祭祠儀礼での最上位の祭壇名と一致するという事実が、上記の考えを裏付けるであろう。つまり、上清太平宮ではなく、楼観、即順天興国観こそが最高位の道観として位置付けられているからである。真君降言の影の演出者が自ずとここに浮上してくるであろう。

先に指摘したように、行状碑の皇祐二年後序末に順天興国観、すなわち楼観の道士二人が名を列ねている事実も、上記の解釈を傍証するものである。同じく後序末に延生観道士の名が見えているが、延生観は楼観境内に存した末宮的道観である。唐代の道教信者として有名な玉真公主が、修真のための山居をこの地に置き、後に道観とされた。[8] 延生観と改称されるのは、端拱元年十月十八日の太宗の勅によるものである。[9] 楼観が順天興国観と改称されたのと同年月日であり、やはり張守真の請によるものであることは間違いない。要するに、真君による一連の神言は、楼観によって演出されたものと考えられるのである。

① 拙稿「唐代楼観考―欧陽詢「大唐宗聖観記」を手がかりとして―」（福永光司編『隋唐時代の道教と仏教』所収　近刊予定）参照。

② 蔡美彪『元代白話碑集録』（科学出版社　一九五五）に、数例の「盩厔太清宗聖宮聖旨碑」を録するのを参照。

③ 『金石萃編』巻一二五録文。

④ 「皇上富有瀛海、端居穆穆、法虚無以用心、貴慈俭以為宝。（中略）謂無為御世、必肇於有為。庶幾一致於理平、触類感資於聖作。繇是啓帝王之盛業、建開拓之嘉謀。或伸義於懐柔、或推功於吊伐。乃舞干而来遠裔、亦提剣以征不庭。則東南負海之邦、旋聞詣吏。□勇近胡之地、親係降王。（中略）道啓冥感、玄符上心。表惟徳以動天、乃降神於右地。建寿宮而雲蹤儼、玄像以星陳。賜号太平、示清浄以寧也。尊名翊聖、知皇天輔徳也。（下略）。」

⑤ 『金石萃編』巻一三三「改賜終南山宮観名額牒。」牒の発給されたのが端拱元年十月十八日で、本牒碑の刻石立碑は六十二年後の皇祐元年十一月丙申である。

⑥ 『長安志』巻一八盩厔県条。

⑦ 「興国」の二字は、太宗の最初の年号「太平興国」と関連することは言うまでもない。前掲宮崎論文に指摘されている如く、この改元はきわめて異例のものである。一般に歴代の慣例では、王朝交替などの革命でない限り、新帝即位後の独自の改元は年が改まってから行うのを常とする。太宗の即位は、開宝九年十月二十日（一説に二十一日）であり、太平興国への改元は、その年もおし迫った十二月二十二日のことである。しかも創業開基の主にこそ似つかわしい四字年号であることを特徴とする。「太平」の二字は、「太平君宋朝第二主」という真君の言に基づくものであろうが、年号名称の決定と真君の予言（あるいは偽作）と、いずれが先かはにわかには判定し難い。また四字年号という点も、年号決定に道教的発想がいかばかりかあったことをうかがわせる。宋代に関して言えば、真宗の大中祥符年号はまさにその典型である。但、太宗の場合、後述するように、彼自身がどの程度の道教信仰の持ち主であったかは疑問で、むしろ、政治的意図に基づいて道教を巧みに利用したと見るべきであろう。

⑧ 前掲拙稿参照。

⑨ 『蘇軾詩集』巻三「留題延生観後山上小堂」詩趙堯卿註「本朝端拱元年十月十八日、奉勅賜此名額。」なお『金石萃編』巻一二三に、建隆二年立碑とされる「慶唐宮・延生観勅」碑を録するが、王昶案語が指摘するように、明らかに後世の偽作碑であるので、内容には一切ふれない。資聖宮については不詳。

五　太宗と上清太平宮

天上より下された真君の神言内容それ自体は、言うまでもなく事実とは認め難いものである。しかし、その神言なるものに対応して、現実に種々の行為がなされたことは、厳然たる歴史的事実である。上清太平宮の建立、神君や張守真への賜号は、その具体例である。これらの歴史的事実を繋ぎ合せることによって、その背景に存したにちがいない政治的、あるいは宗教的な意図を読み取ることが要請される。ここでは具体的には、太宗と楼観のそれぞれの意図である。具体的事

実として確認できるのは、上清太平宮の前身である、張守真が私第に築いた北帝宮に対して、太平興国二年の太宗詔による修建が最初である。このように、太宗即位以後に限られることは、太宗の強い関心の背景に何らかの事情、あるいは政治的意図が存したことを示すものである。従前は張守真の私的な真君祭祀の場であった北帝宮を、かくも大規模に増修して上清太平宮に改めたのをはじめとして、さまざまな特別の国家的庇護を加えるなど、太宗の上清太平宮に対する配慮は並はずれたものが認められる。他の特定の寺観類に対して、太宗がかほどの関心を集中している例は見当らない。それ故にこそ、太宗の崩御後においても、上清太平宮は太宗との特別な関係を有する道観として位置付けられることになる。すなわち、太宗の御容を奉安する神御殿が全国に七箇所設けられているが、その一にこの上清太平宮が含まれる。[1] 真宗即位直後の咸平三年（一〇〇〇）八月に、本宮に新たに神御殿が増設されて太宗の御容が奉安されたのである。[2] さらに真宗崩御後には、真宗の神御殿も本宮に設けられるが、本稿では、本宮と真宗の関係にまでは言及する余裕はない。『真君伝』が真宗による奉勅撰であったことを付記するに止めたい。さて、本宮における太宗神御殿は、修復を加えられながら、ほぼ北宋一代を通じて維持されていたことが確認できる。[3] このように、上清太平宮に太宗・真宗の御容を奉安する神御殿が設けられたのに対し、太祖の神御殿が全国七箇所に存在するにもかかわらず、本宮には設けられていないことはきわめて示唆的であると言わざるを得ない。

太宗と上清太平宮の関係で見落すことが出来ないのは、趙普が介在することである。趙普は、早くは「陳橋の変」を太宗とともに演出し、「金匱預盟」にも直接関与し、さらには秦王廷美謀叛事件においても重要な役割を担った人物である。「金匱預盟」とは、太祖・太宗の母昭憲太后杜氏が臨終において太祖を召し、太祖の死後は帝位を弟太宗に伝え、太宗の死後はさらにその弟廷美に帝位を伝えるよう願託した。太祖は誓書をしたため、側侍していた趙普が最後に署名した。太祖はこの誓書を金匱に蔵して宮人に命じて厳重に保管させたというものである。[4] 秦王廷美の謀叛事件は、太平興国七年三月に発覚し、時の宰相盧多遜も趙普の告発により連坐して失脚した事件である。廷美は西京洛陽での謫居を命ぜられるが、

趙普の言により房州に移され憂死する。この事件発覚に際して、趙普は金匱の誓が存することを太宗に明かし、太宗の信任を強める。[5] ところで、金匱の誓なるものが本当に存在したかどうか、はなはだ疑わしいのであって、即位後の太宗が趙普とともに作り上げた可能性が大であると言われる。[6] また秦王廷美の謀叛事件も、すでに太平興国四年に太祖長子徳昭は迫られて自殺し、同六年には次子徳芳も病没した後を承けて、太宗が自らの血統に帝位を継承させんがための政治的工作以外の何ものでもない。このように所謂「金匱預盟」と秦王廷美謀叛事件とは、全く同じ脈絡上の政治的疑獄であり、太宗の政治的意図がこれらの背景に存することは否定し難い。そしてこれら一連の政治的事件の参謀として推進したのが、太宗の意をうけた趙普であったこともまず間違いなかろう。この趙普が上清太平宮において奇怪な真君の神話を得る話しが『玉壺清話』巻六に次のように見えている。

年七十一、病久しく生意なし。宝とする所の雙魚犀帯を解き、親吏甄潛なる者を遣り、上清太平宮に詣り醮星し、露懇して以て往咎を謝せしむ。（中略）神曰く、趙某、開国の忠臣なり。奈何が冤累逃る可からざるや。（中略）神、淡墨一巨牌を以て之に示す。濃煙、その上に罩む。但、牌底に大（一作火）字を見すのみ。潛帰る。公、力疾し冠帯して寝を出ず。涕泣して神語を受く。牌底の大字を聞き、公曰く、我、之を知れり。此れ必ずや秦王廷美なり。然も当時の事、曲は我に在らず。なんぞ自ら盧多遜の堂吏趙白を遣りて（廷美）と交通せるに与からんや。其の事暴露せられ、自ら其の害を速む。豈に当に予を咎むべけんや。但、願くば早逝して面のあたり幽獄に於て弁ぜん。曲直自ら正さると。是の夕、普卒す。云々。[7]

上清太平宮での真君の神言は、趙普の往咎として秦王廷美の謀叛事件を捏造したことを暗に責めるのに対し、趙普は発覚後に関与したことを認めつつも、直接の関連を否定している。この記事もやはり、事件の首謀者が太宗であることを言外に色濃くにおわせるものと言えよう。太宗嗣位を予言した真君であれば。太宗の好ましからぬ行為に言及するはずがないのであって、『真君伝』ではきわめてあいまいな表現としてしか記されていないのは、けだし当然である。しかしながら、

恐らく別系統の史料系譜に属すると考えられる『玉壺清話』のこの記事によって、はしなくも太宗と趙普による秦王廷美謀叛事件捏造の一端が暴露されたと言える。逆な言い方をすれば、『真君伝』のかような表現それ自体が、もっぱら太宗の嗣位を正当化する意図をもったものであることを示すものに他ならないと言えよう。

① 楊万里『揮麈録』巻上、『宋史』巻一〇九礼志一二古礼一二神御殿条。

② 『玉海』巻一〇〇郊祀・興国鳳翔上清太平宮条「咸平三年八月、置殿、奉太宗聖容。」

③ 蘇轍『欒城集』（四庫全書珍本初集）巻三四「鳳翔府太平宮修殿告遷太宗神御祝文。」この祝文は元祐五年（一〇九〇）のものである。

④ 『涑水紀聞』巻一等参照。

⑤ 『長編』巻二二・二三、『宋史』巻二四魏王廷美伝参照。また同巻二五六趙普伝には「会柴禹錫・趙鎔等告秦王廷美驕恣、将有陰謀竊発。帝召問。普言、願備枢軸以察姦変。退又上書、自陳預聞太祖・昭憲皇太后顧託之事、辞甚切至。太宗感悟、召見慰諭。（中略）及涪陵（廷美）事敗、多遷南遷、皆普之力也。」とある。

⑥ 前掲宮崎論文参照。

⑦ 『真君伝』にも「淳化中、西京留守中書令趙普、嘗遣使備礼、致醮虔祈、願聞休咎。真君降言曰、趙普扶持社稷、甚有功勲。上帝所知、賜汝福寿。然以大妨小、幽府亦有冤対、当啓誦真経、告祈天地、首懺前非。吾亦与汝達于上帝、庶解茲咎、汝官職寿数、已有限矣。其使録之而去。普跪読感涕、因焚香謝過、復遣人詣宮設醮。」と見え、秦王廷美謀叛事件には直接ふれず、かなりぼかされた表現となっているが、『玉壺清話』に言うのと同一事であることは明らかである。なお『宋史』本伝では「先是、普遣親吏甄潛、詣上清太平宮致禱。神為降言曰、趙普、宋朝忠臣、久被病、亦有冤累耳。潛還。普力疾冠帶、出中庭受神言、涕泗感咽。是夕、卒。」と見える。

結　語

太宗嗣位をめぐる疑惑に関して、僧文瑩撰の『湘山野録』より確実に早い時期の諸記録を検討してきたが、結論的に言えば、その疑惑はむしろ深まったと言わざるを得ない。もっとも、太宗の太祖弑害が事実か否かは、やはり千古の疑案と言う外ない。しかし、太宗嗣位当時において、すでに一定の疑念が存在していたことは、即位直後の時点で太宗が懸命に自己の帝位継承の正当性を強調していることからうかがえる。彼の嗣位正当化の最たるものが、鳳翔府盩厔県望仙郷に降ったとされる翊聖保徳真君による「真主」、「太平君宋朝第二主」、「晋王有仁心」等の神言と称せられるものである。繰り返し言うが、太宗嗣位に関する真君の一連の予言が事実であるとはとうてい考えられない。にもかかわらず、真君を奉

安する荘大な上清太平宮が勅命により造営され、手厚い国家的庇護が加えられるだけでなく、真君の神言媒介者たる張守真に対しても、尊号勅賜や楼観関係の度重なる請願が全て勅許せられるなど、太宗の恩寵ぶりは異常とも思えるものがある。史料上は、太平興国五年建の「上清太平宮碑銘」にまで溯及できる太宗と真君との関係は、咸平二年初建の「伝応大法師行状」碑を経て、大中祥符九年表上の『翊聖保徳真君伝』で一つの完成した体裁としてまとめられる。『長編』や『皇朝事実類苑』等所引の楊億『談苑』の当該記事は、既述したように、『真君伝』に依拠したものであり、他書の関係記事も、おおむね『真君伝』系統と認められる。[1] その点、文瑩撰の『湘山野録』と『玉壺清話』は、やや伝聞系統を異にするものと考えられることは既述した通りである。

さて、太宗の側にとって、嗣位をめぐる巷間での疑惑をはっきりと否定し、民心を収攬することは政治的な急務であったろう。太宗のきわめて冷徹な政治的人間像[2]から推して、真君の存在やその神言を頭から信じていたとは考え難い。確かに太宗にも一定の道教志向が認められはする。その例として常に引き合いに出されるのが、既に言及した華山の陳摶との関係である。ところが、陳摶に関しては、先に注記したように、『真君伝』では真君の神言として「摶の錬気養神、頗る其の要を得。然れども物に及ぶの功は未だ至らず。但、主掌する所有るのみ」と云い、「行状」碑での張守真の臨終の言「吾、怪魅を誅翦するの功あるも、飛昇を修錬するの妙を虧く。（中略）上帝、吾の物に及ぼすの勲を録して、已に符命を領し、五土の主を授けられたり」ときわめて対称的なことに気付く。つまり、個人的修養による僊化よりも、民衆救済に重きを置く評価が認められる。政治的に利用価値があるのは、言うまでもなく、後者の道教的立場であって、事実、両者に対する太宗の待遇も、張守真に対する方がはるかに厚いものがある。太宗が神言を政治的意図から利用するに際し、除鉉、趙普等が恐らく重要なブレーン役を担ったと考えられるが、神言を演出したのは楼観派道教勢力であったろう。張守真は、出家入道、鐘の移置、観額奏請など、常に楼観と密着した形で行動し、いわば楼観の利害代弁者として立ち表われる。神懸りの癖を有し、長嘯の法を善くしたかとも思える張守真は、楼観の具体的示唆に基づく太宗嗣位正当化を強調す

る神言を、本人は恐らくはそれと信じて伝えた、あやつり人形のような存在ではなかったか。唐代に国家道教的立場にあった楼観派道教にとって、民衆道教色を強める唐末五代を経た宋初の時期は、唐代の国家的庇護はもはや完全に喪失して、その教勢の衰退はおおうべくもなかった。新たに成立した宋王朝に何らかの働きかけを行うことで、その国家的庇護の下に教勢を再興させる好期であったはずである。かつて楼観は、隋末の群雄並び立つ情勢下において、いち早く李淵集団に積極的に肩入れすることで、以後の唐一代にわたる隆盛の基礎を築いた経験をもつ。統一を目前にした宋朝創業期に当り、かつて隋末唐初と同じく、再び積極的な宗教的、政治的工作を意図したことは十二分に考えられる。しかし、その立地は唐代にあっては長安西郊の至近にあって、きわめて有効に作用したものの、宋朝首都開封との少なからざる距離の問題、さらには、太祖期における仏教に好意的な雰囲気が支配する政権中枢のあり方[3]などは、楼観側の働きかけを実効のないものに帰したと思われる。ところが、太祖の突然の崩御と弟太宗の嗣位、その不自然な兄弟間の帝位継承をめぐって巷間に広まる疑惑、即位後の太宗による実質的建国者を標傍するが如き、太祖期の政策を一八〇度転換する諸々の新政策などなど、小革命とでも言うべき情勢の一大変化が現出する。楼観側にとって願ってもない情勢の好転である。かくて太宗嗣位の不明朗さを真君の神言によって明確に否定し、あらかじめ天上の意志によって嗣位は既定のものであったとする筋書が、楼観勢力により構成され、張守真を介して人間(ジンカン)に伝えられる工作をしたものであろう。ところで、『真君伝』後半には、真君の神意を体した張守真による多くの霊験が列記されているが、疾病を治愈し、狐憑きを除去するなど、民衆レベルでの救済・怪異破除の例が圧倒的に多い。恐らく張守真の本来の姿は、このような民間信仰における巫的存在に近いもので、道教教理にどの程度の造詣を有していたか、はなはだ疑問である。「行状」碑に「吾、怪魅を誅翦するの功有るも、而るに飛昇の妙を修錬するを虧く」と自ら言い、『真君伝』においても、真君と張守真の間にかわされる教義問答はきわめてわずかな部分を占めるのみで、[4]取って付けた感すら覚えさせることが、それを示している。張守真の存在は宋初の道教信仰の傾向の一端を示すものと言えるが、彼を伝統ある楼観の道士に仕たて上げることで、道教的権威はしかるべく付与さ

れることになり、皇帝嗣位という政治上の最も重要な問題と関連付けることもより容易になったはずである。

太宗の帝位継承問題を正当化せんとする政治的意図と、教勢回復を図らんとする楼観道教勢力の宗教的意図とが、見事に一致した結果が、太宗と上清太平宮・張字真との諸関係であったと言えよう。

① 『隆平集』巻三嗣祭条「有神降於終南山道士劉守真、以為天之宗神、号黒殺将軍。守真毎斎戒祈請、必至。至則空中風粛然、声如嬰児。独守真能暁。開宝九年、太祖不予、駅召守真。令問焉。曰、上天宮闕成、玉鎖開矣。晋王有人心。訖言不復降。太平興国六年、封神為翊聖将軍。」『玉海』巻一〇〇郊祠・興国鳳翔上清太平宮条「国初、有神降于盩厔民張守真家。守真為道士、即所居創北帝宮。太宗嗣位、真君降言、有忠孝加福愛民治国之語。詔於終南山下築宮、凡二年宮成。宮中有通明殿、題曰上清太平宮。如真君預言祀神之夕、上望拝。興国六年十一月壬戌、封神為翊聖将軍。祥符七年、加号翊聖保徳真君。凡真君所降語、帝命王欽若、編為三巻。九年十月己卯、上之。上作序、名曰真君伝」『仏祖統紀』巻四三末（T 49・401 b～c）「国初、有天神降于盩厔張守真家。自言、玉帝之輔、奉上帝命護衛宋朝。所言禍福皆験。守真遂為道士。至是、上召守真入見。陳立壇設醮之法。敕於瓊林苑設周天大醮。遣起居舎人王亀從、就終南山建上清太平宮、以奉天神。上親征太原。天神降言、宜設醮謝勝捷。蹤旬王師奏捷。上遣使詣宮醮謝。其夕、降言曰、上帝諸天皆喜、国祚延久、過於有唐。乃詔封天神為翊聖保徳真君、賜守真崇玄大師。自是公卿子庶詣宮祈叩、必降語告誡。（国朝会要）。」

なお、李攸撰の『宋朝事実』巻七道釈条に、出所は明記しないながら、かつ一部節略もあるが、ほぼ忠実に『真君伝』を引用している。ちなみに、李攸は、北宋末・南宋初の人である。

② 荒木敏一「宋太祖酒癖考」（『史林』三八―五　一九五五）に、太祖・太宗の性格や人間像の対比が簡潔になされているのを参照。

③ 竺沙雅章「寺観の賜額について」（前掲書所収）注④参照。

④ 『仏祖統紀』巻四三（T 49・397 b）には、『真君伝』の教義問答をでたらめだとした仏教側からの手厳しい非難を載せる。「又王欽若奉詔、撰翊聖真君伝。其間論仏、最為失義。如翊聖云、諸天万霊仙衆梵仏、悉来朝上帝。夫仏為三界師、為天中尊。仏所住処、梵天帝釈皆来衛従。明知天帝所以奉仏也。今伝言仏来朝帝。甚為無状。翊聖既自言、帝輔其位高矣。未応有此、失理之言。欽若稍称知仏、作伝之辞、亦未必有此語。特恐道流不知天位、妄撰此言、入於伝中。雖欲尊天而卑仏、適所以誣天而慢仏也。戒之哉。」北宋前半期の太祖期から太宗期、太宗期から真宗期への政治的動向、とくに本稿でもわずかに言及した徐鉉や王欽若、その他の江南出身官僚の役割について、あるいは、江南茅山派道教の動向など、検討を要すべき問題が少なからず存するが、本稿ではそこまで立ち入る余裕がなかった。後考を期したい。

〔附記〕 本稿は昭和五十八年度文部省科学研究費総合研究(A)「十世紀以降二十世紀初頭に至る中国社会の権力構造に関する総合的研究」による研究成果の一部である。

（京都大学教養部助教授）

A rumor that *Song Taizu* 宋太祖 was murdered and Taoist temple *Shang-qing-Tai-ping-gong* 上清太平宮

by

Hajime Otagi

There has been a rumor that Song Taizu was murdered, because the process of the succession from Taizu to his younger brother *Taizong* 太宗 was not clear and all proofs that we have on this succession are circumstantial ones. In the policy of Taizong for Taoism we can detect further proof in which this rumor was certified as correct. This proof is as follows.

The *Louguan pai* 楼観派 of Taoism had a base in the western suburb of *Chang'an* 長安 and wielded great power in the Tang period, but it had declined since the end of that period. Song Taizong supported this party unusually. Immediately after his succession an oracle was disseminated, which said that the succession by Taizong had been decided. Taizong built a magnificent Taoist temple for the god of the oracle. Investigating this oracle we can get some evidence that leads us to suspect that it was made by the Louguan pai intentionally. And we can consider that Taizong used it in order to rationalize his own succession. This affair shows a political phrase of the early Song period with *Zhenzong* 真宗's worshipping Taoism and the trend of the bureaucrats from *Jiangnan* 江南 outstandingly.

The Origins of Machiavelli's Thought
——As Revealed by His Choice of Expressions——

by

Eiichi Shibayama

The paper attempts to probe the origin of the complex thought of Niccolò Machiavelli—and specifically his political outlook and historical ideas—through the particular nuances with which he uses such com-